

青森県における馬鈴薯について

青森県下北地方農林事務所 鈴木 茂

1 馬鈴薯の位置

青森県の平成10年における農業粗生産額は、約2,800億円で、米、野菜、果樹及び畜産の部門別では、それぞれ728億円、667億円、611億円及び625億円となっており、各部門がほぼ同水準にある。このように4部門が均衡のとれた農業生産となっていることが青森県農業の特徴であり、長所でもある。

馬鈴薯を野菜部門に入れるか否かは、それぞれの統計で異なるようであるが、上記の野菜の生産額は、馬鈴薯を含めた生産額である。

青森県産野菜の稼ぎ頭は、なんと言ってもながいもであり、その後にだいこん、にんにく、にんじん、トマト、メロン、ごぼう、ねぎと続き、馬鈴薯は9位となっている。

馬鈴薯の作付面積は、昭和32年（1957）に8,656haと過去最高を記録したが、その後は、収益性の高い他の野菜に栽培が移って平成10年には1,790haとなり、約40年の間に5分の1に減少した。

しかし、最近では、その減少傾向が緩やかになり、本県における馬鈴薯の地位が確定しつつある。

本県では、こうした位置にある馬鈴薯であるが、全国的に見ると、作付面積（1,790ha）が7位、収穫量（41,400 t）が5位、出荷量（28,400 t）が6位と健闘している。

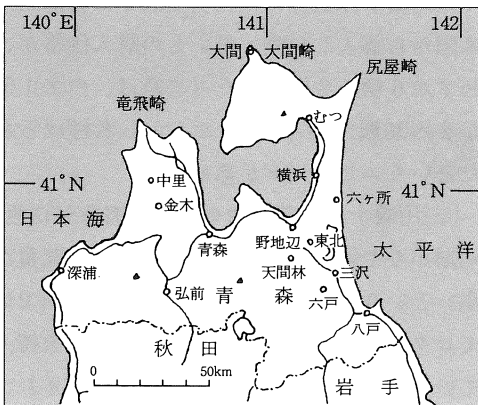
馬鈴薯は、ジャガイモという名で古くから人々に愛されてきたが、最近では、ポテトチップス、フライドポテト、ポテトサラダなど英語(?)的表現が主流で、子供たちにジャガイモだよと言えば、「違うよ。ポテトだよ。」と瞬時に言い直される始末である。呼び名は変わっても、広く親しまれているのであれば、まあいいかと勝手に妥協しながら、馬鈴薯の歴史を振り返ってみた。

2 馬鈴薯生産の歴史

(1) 江戸時代

馬鈴薯は、慶長3年（1598）、オランダの商船でジャワ島のジャカルタから長崎港に運ばれた。当時は、ジャガタライモあるいはジャワイモと呼ばれ、鑑賞用として植えられていた。渡来後、90年を経た天和3年（1683）ころから栽培が盛んになり、暴風、低温などにより稲作が凶作となった天明（1783）、天保（1836）の大飢饉にあっても生育できるという特質が認められたが、なぜか目立った生産振興は見られなかった。

一方、18世紀末（1789年～1800年、寛政年間）には、ロシアから樺太を経て北海道にも



伝えられ、北海道、東北で栽培されている。栽培されたきっかけは、当時しばしば起こった飢饉であった。

蘭学者の高野長英が天保7年(1836)に「救荒二物考」を著し、早生そばと馬鈴薯の栽培を奨励している。さらに、19世紀の中ごろ(安政年間)には、北海道函館在亀田村で水車を利用してでん粉を製造していたと伝えられている。

「風土の刻印ヤマセ北東風社会」(東奥日報社)によると、青森県では八戸市の佐々木吉政氏が馬鈴薯の記録を残している。「市川日記」と呼ばれるその記録集には、天保3年(1832)からの7年凶作について悲惨極まりない状況が克明に書き記されていて、凶作続きで備荒・救荒食も底をつき、ついには農耕馬、果ては人肉までも食べざるを得なかった人々の姿が生々しく綴られている。

こうした中で、自ら馬鈴薯を作って命をつないだ佐々木氏は、周りの者にも栽培を勧めたが、「馬鈴薯の価値をさっぱり理解しない。ここは凶作、不作続きの風土だから是非取り入れるべきなのに」と嘆いている。

佐々木氏が種いもを入手できたのは、氏が青森県百石町の酒を大畑町から北海道に移出する仕事に携わっていた関係で北海道産の馬鈴薯との出会いがあったためではないかという推理もある。

「市川日記」は、子孫に当たる向谷地又三郎氏が解説し、昭和46年と60年に小冊子を刊行している。馬鈴薯は江戸時代後期に下北地方でも栽培されたが、味が淡泊な上に、「毒がある」との偏見から普及しにくかったようである。

(2) 明治時代以降

明治7年(1874)に弘前市の菊池権衛氏が北海道から種子を取り寄せ試作したところ、多収で栽培が容易であることがわかり、希望者に試作させた。しかし、食用にすると難病にかかるなどの迷信があり、あまり普及しなかったと言われている。

その後、明治17年(1884)の稲の凶作を契機に県が馬鈴薯の種子を配布して栽培を奨励した結果、徐々に普及した。特に明治35年(1902)の凶作から注目され、急に栽培が拡大している。

栽培面積は、明治21年(1888)に563ha、明治35年(1902)に、2,049ha、明治40年(1907)には4,268haへと着実な増加をたどった。

品種では、明治7年ごろに米国から渡来した「アーリーローズ」がさがりけとなった。

この馬鈴薯は、米国が原産で形が長楕円形、外皮が淡紅色で、芽はやや浅く肉色は淡黄白色であるとされている。大正5年(1916)から昭和11年(1936)まで青森県の奨励品種であった。

明治38年(1905)には、同じく米国から「三円薯」(原名:パーモント ゴールドコイン)が輸入され、作付けが始まった。この「三円薯」の名称には、明治38年に青森県が米国から導入した際、種いもの購入価格が、わずか6個で3円もした(当時は、白米1俵が5円30銭であった。)ことから名付けられたというエピソードがある。

「三円薯」は、芽がやや浅く、肉色が白色、熟期がやや遅いものの、品質が良好で収量が高いという特性をもち、しかも味が淡泊でいてコクがあり、煮え易く粉をふく性質を持っている。この中で、特に多収性が注目され、

大正5年には青森県の奨励品種となっている。

一方、「男爵薯」は、明治40年頃、北海道渡島国当別の川田男爵によって米国から輸入されたもので、青森県は同川田農場から種いもを取り寄せている。

昭和時代になると、本県での作付け品種は、「男爵薯」、「三円薯」が主力で、一部に「農林一号」、「メークイン」も見られた。「男爵薯」は大正5年から、農林1号は昭和23年(1948)から青森県の奨励品種となっている。

「三円薯」は、朝鮮動乱勃発時に米軍の特別需要として国産の馬鈴薯が調達された際、輪腐病(表面からは見えない)の発生という販売上の事故が続き、爾来、消滅に向かった。

その後は、おのずと「男爵薯」が県産馬鈴薯の中心となったのであるが、昭和40年代の後半からは、「メークイン」にその座を譲っている。

「メークイン」は、19世紀から英国で栽培されていたが、日本には大正6年(1917)に輸入され、昭和3年(1928)に北海道で優良品種として認定されている。その命名は、5月祭りで選ばれる女王にちなんだとされている。青森県には昭和40年代後半に導入され、昭和60年(1985)に奨励品種となった。

「メークイン」が日本で人気を博したのは、「男爵薯」に比べて芽が浅く、皮むきが容易な上に、煮くずれしにくく、肉ジャガなどに適していることが主な理由とされている。

そのようなこともあって、現在、青森県の馬鈴薯栽培では、生食用の9割が「メークイン」で占められている。

ここで、残りの1割の中で特産品として健闘している本県ならではの馬鈴薯「オコッペいも」を紹介したい。

3 「オコッペいも」物語

(1) 作付け地

「オコッペいも」を特産品として作付けしているのは大間町(おおままち)である。大間町は、青森県下北半島北部に位置し、津軽海峡を隔てて北海道戸井町の汐首岬とは17.5 kmの距離にある本州最北端の町である。映画「飢餓海峡」や「魚影の群」の舞台となった町でもある。

現在では、NHK朝の連続ドラマ小説「私の青空」でヒロイン・なずなの出身地として時々登場するので、テレビ画面で町をご覧になった方も多いと思われる。

(2) 「オコッペいも」のルーツ

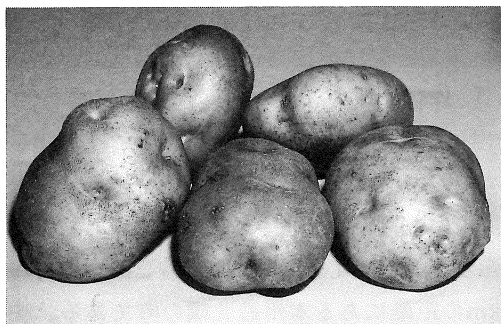
「オコッペいも」のルーツは、前述の「三円薯」である。姿を消したはずの馬鈴薯であるが、味の良いことから農家が自家用に作りつづけていたのである。

その「三円薯」を大間町では「オコッペいも」という名前の特産品として生産・販売に取り組むこととなった。しかし、この「三円薯」は、長年、自家採種を繰り返してきたため、他の品種や雑種が混ざった可能性もあり、純粹の「三円薯」であるかどうかあやしむ声もあった。

そこで、平成元年ごろ、むつ地域農業改良普及センターがこのいもの品種名を確かめようと奔走した。関東地方に「三円薯」があることをつきとめ、大間町の自家用のいもとその「三円薯」を比較したところ、「三円薯」に間違いないことを確認した。

かくして、正真正銘の「三円薯」とされた「オコッペいも」は、自信をもって生産・販売されるに至った。(現在は、種苗管理セン

▼オコツペいも



ター上北農場から原原種を導入して種苗の生産をしている。）

この「オコッペいも」は、大間町の奥戸（オコッペ）という地域で主に栽培されていることから、その地名をとって名付けられたものである。

大間町では、水産業が主要産業であるが、「オコッペいも」を陸の特産品として販売先を確保するため、首都圏でのイベントや県内の農林水産祭などにも参加し、積極的なPR活動を行っている。

フライドポテト、ポテトポタージュ、鉢巻（塩煮）、煮っころがし、じゃがフライ、中華風サラダなどに向いており、農協などでの窓口販売のほかに、宅配による販売も行っている。問い合わせ先は、JAはまなす佐井出張所となっている。（電話0175－38－2016、ファクシミリ0175－38－2082）

4 馬鈴薯と青森県

(1) ヤマセとケガジ

ヤマセとは、山背と書き、東北の太平洋側で夏に吹く冷たい北東風のことである。ケガジとは、本県では凶作のことを云う。（飢渴（きかつ）が訛ったのかも知れない。）

青森県は、特に太平洋側でこのヤマセによるケガジに苛まれてきた。天明、天保の大飢

饉については、前段で少し述べたが、本県の馬鈴薯を語るには、やはりヤマセとケガジに触れなければならない。

ヤマセは毎年5月から8月にかけて、オホーツク海の冷たい高気圧がもたらす東寄りの風で、青森県の太平洋側から三陸海岸一帯にかけての地域では繰り返し吹走する。

ヤマセが吹き始めると、空は曇り、細かい霧雨が絶え間なく降る。気温は平年値より5度から10度も低下し、真夏でも肌寒く感じることもしばしばある。

ヤマセのため、太平洋側は稲が凶作の年が多く、この凶作は「ケガジ」といって恐れられている。

古文書に当たってこの地方の凶作を調べた人によると、昭和56年（1981）までの約800年間に、140回の凶作を確認できたという。

凶作は、冷害だけでなく洪水や霜、台風、干ばつ、地震、病虫害などが主因だったり、それらが重なり合ったりしているが、ヤマセによる冷害が主因である場合が圧倒的に多いそうである。比較的記録のしっかりしている江戸時代以降の380年間に限ってみるとこの期間だけで120回を数えるという。

天保の7年ケガジに代表されるように、ケガジは、何年も連続することもある。

ヤマセは餓死風とも呼ばれる。南部藩では、天明3年（1783）の大凶作の対応策として、「水につけてふやけたワラをウスでつぶし、米の粉、それが無ければワラビの根をすりつぶしたものとゆでて食べ」などと触れ書きを出した。それもなくなくなり、馬、猫、犬も食べ、人肉を食った事例まである。その記録によれば、岩手県北部から青森県全域において175,000人も餓死している。

(2) 馬鈴薯とケガジ

このような状況の中でも、前述の佐々木氏のように馬鈴薯を食用として作って生きのびた人もいる。

昭和6年(1931)の凶作では上北地域における稲作農家の95%が70%以上の減収となった。そのため、この地域では、稲よりも馬鈴薯、なたね、大豆、そばなど畑作物中心の地域となっていた。

なかでも馬鈴薯は、ヤマセが強い年でも、ある程度の収穫が確保できることから、最も重要な作物として位置付けられ、人々の命を支えてきた。「ケガジの時でも、いも畑3反もあれば、10人が生き延びられる」という話もある。

馬鈴薯は、主食を補うものとして、汁に入れたり、そのまま煮て食べたりした。さらに、くずいもも捨てずに澱粉をとった。それだけに重宝する作物であった。また、馬鈴薯を凍らせ、その解けるのを待って、皮をむき、水にさらしてから自然乾燥させた凍みいも、寒干しいもなどと呼ばれる貯蔵いももあった。よく乾燥しているので、何年経っても変質しないという。

これを食べる時には粉にして、もちやひつま(すいとん)などにした。このような形で救荒食などにして凶作に備えていたのである。

青森県における馬鈴薯は、現在でも、その面積が減少しつつあるとはいえ、ヤマセ地帯の代表作物として重要な地位にあることには変わりない。

5 馬鈴薯の振興方向

第4次青森県野菜振興計画(平成8年3月

策定)では、平成17年の馬鈴薯作付目標面積を1,740haと設定しており、ほぼ現状維持を目指している。

栽培面では、にんじんなど他の野菜との労働配分を考慮し、普通栽培とマルチ早掘栽培を適度に組み合わせた計画的な作付を誘導し、7～8月の安定継続出荷を維持したい。

また、高品質生産には、適切な種子更新や病害虫の適期防除が大切であり、収穫後の乾燥調製にも細心の注意を配りたい。

青森県は、現在、馬鈴薯で東部上北(三沢市、六戸町)、北部上北(横浜町、野辺地)、中部上北(東北町、天間林村)、六ヶ所(六ヶ所村)、深浦(深浦町)及び津軽北部(金木町、中里町)の6地域が産地指定を受けているので、今後もこうした地域を中心に生産・出荷体制の充実に努めていくこととしている。

(参考文献)

- 「日本の食生活全集2 聞き書青森の食事」/1986/農山漁村文化協会
- 「甘しょ・ばれいしょ おいも全書」/1991/財団法人いも類振興会
- 「農業技術大系作物編」/1994/農山漁村文化協会
- 「青森県野菜農業発展の軌跡」/1997/地域農業調査研究所
- 「青森県市町村要覧」/1997/財団法人青森地域社会研究所
- 「97～98るるぶ下北半島」/1997/JTB
- 「農学大事典」/1977/養賢堂
- 「野菜園芸大事典」/1988/養賢堂
- 「平成10年園芸作物統計」/1999/東北農政局青森統計情報事務所
- 「青森県農業試験場60年史」/1959/青森県農業試験場
- 「高収益畑輪作体系確立技術開発研究(前期)研究成果報告書」/1995/青森県畑作園芸試験場
- 「図説いきいき青森やさい物語vol.3」/1999/青森県農林部畑作園芸課